

総合的な学習の時間の充実と学ぶ力の育成

指導主事 西 川 潔
Nishikawa Kiyoshi

要 旨

中央教育審議会義務教育部会から先般出された答申で、総合的な学習の時間について「大きな成果をあげている学校がある一方、趣旨・理念が必ずしも十分に達成されていない状況も見られる」という報告が出された。総合的な学習の時間が始まって小・中学校で4年が経過した今、この時間を通して子どもたちに学ぶ力を育てる意義について考察する。

キーワード： 育てたい力、教科学習との関連、ゲストティーチャーの活用

1 はじめに

各学校の創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開し、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」をはぐくむことをねらいに設けられた総合的な学習の時間。各学校における特色ある取組の成果が見られる一方で、課題も少なくない。平成17年9月に内閣府が保護者を対象に実施したアンケートでは、「ほとんどのものが役に立っていないので、総合的な学習の時間はやめるべきである。」という回答が全体平均で18.8%に上っている。そうしたなか、総合的な学習の時間の充実とこの時間を通して育てたい学ぶ力について考察し、これからの総合的な学習の時間の在り方について研究したい。

2 研究目的

総合的な学習の時間において、子どもたちに「真の学ぶ力」を育てるためにどのようなことが大切なのかを研究する。

3 研究方法

文部科学省が実施した総合的な学習の時間にかかわる調査結果や県教育委員会制作生涯学習番組「学校へようこそ」で取り上げた宇陀市立内牧小学校（平成17年12月31日までは榛原町立内牧小学校）3・4年生の一年間にわたる総合的な学習の時間の取組を基に、研究課題を明らかにしていく。

4 研究内容

(1) 総合的な学習の時間の成果と課題

文部科学省が児童・生徒・保護者を対象に平成15年に実施した調査によると、総合的な学習の時間を「好き」又は「どちらかというが好き」と回答した割合が、小学校5年生で89.1%、中学校2年生では77.6%となっている。その理由として、「ふだん体験できないようなことが体験できるから」というのが小・中学生ともに70%を超えている。これは、総合的な学習の時間に体験

学習が積極的に導入されていることの表れであるとともに、従来の学習ではできなかった様々な体験活動を子どもたちが行っているということが分かる。このほかにも工夫した授業計画の組み立ての機会が増え、子どもたちが自ら調べ・まとめ・発表する力、思考力・判断力・表現力、学び方や学習意欲の向上につながった、学校であったことを家で話すようになったなど、教員や保護者からも肯定的な意見が多い。

一方、約4割の教員が、総合的な学習の時間に体験や活動をさせるのに精一杯で、学習意欲も含めた学力を十分に伸ばすことができなかつたと回答している。また保護者が総合的な学習の時間で希望する事柄と、教員が心がけている授業には大きな開きが見られる。例えば、「教科で勉強していることと実生活に必要なことの実感できるような授業」の項目では、保護者の約9割が大切と感じているのに対し、教員は約7割に留まっている。

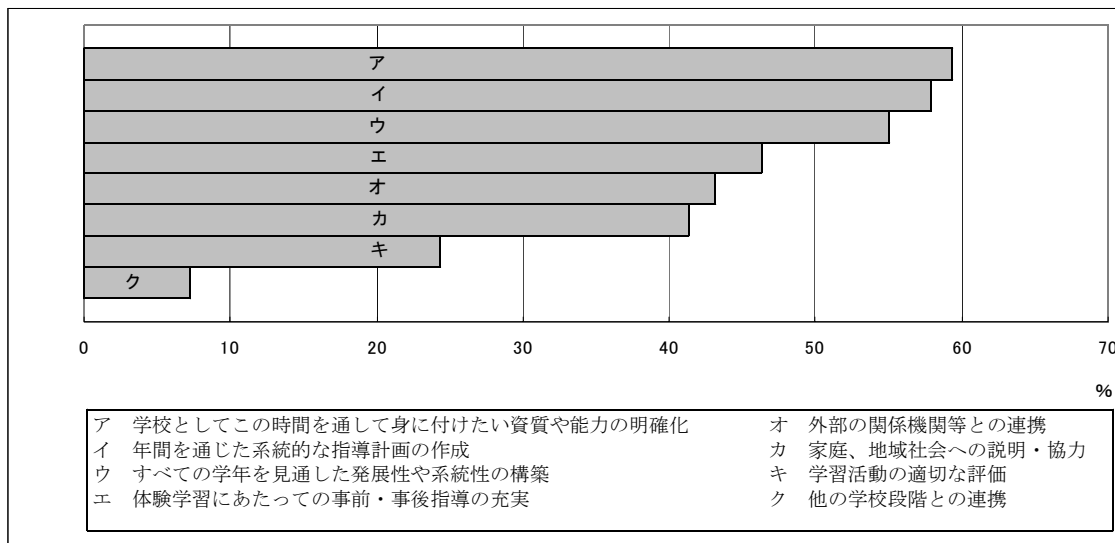


図1 「総合的な学習の時間」実施上の重点（平成15年度文部科学省調べ）

今回のアンケート結果で、最も注目されるのは教員を対象に行った『総合的な学習の時間』実施上の重点である（図1）。この中で、教員が最重要点としてあげたのは「子どもたちに身に付けさせたい資質や能力の明確化」であった。総合的な学習の時間は教科学習のように学習指導要領に詳しく内容が示されておらず、また教科書もないため、それぞれの学校の創意工夫ある取組が求められている。そのため、ややもするとかつて批判された「^は這い回る経験主義」に陥り、体験はあるが結局子どもたちに何も力が付いていないという結果にもなりかねない。今回のアンケート調査で「子どもたちに身に付けさせたい資質や能力の明確化」が最重要点にあがったのも、こうしたところに要因があるのかもしれない。

(2) 子どもたちに学ぶ力を付ける総合的な学習の時間

子どもたちに学ぶ力を付けるための総合的な学習の時間の在り方について、宇陀市立内牧小学校3・4年生の一年間にわたる取組「そばの鉄人になろう！」を通して考えてみたい。

ア 子どもたちに身に付けさせたい学ぶ力の明確化

内牧小学校では、学校全体として生活科と総合的な学習の時間を通して子どもたちに育てたい力を明確にしている。

表1 生活科、総合的な学習の時間を通して子どもたちに育てたい力

育てたい力	1 ・ 2 年	3 ・ 4 年	5 ・ 6 年
発見する力	○自分のやりたいことを考える。	○様々な体験活動（自分たちの興味・関心）から課題を見付ける。	○自分や集団の課題を見付ける。
調べる力	○めあてをもって活動する。 ○活動に必要な物や場所などが分かる。	○様々な方法で情報を収集選択し、よりよい方法で主体的に解決する。	○解決への見通しをもって活動し、必要な場合は計画を修正する。 ○的確な資料や取材先を見付け、得た情報を吟味して取捨選択する。
表現する力	○自分のしたことをみんなによく分かるように発表する。	○考えたり調べたりしたことをいろいろな方法を工夫して発表する。	○聞き手、読み手に意見や主張が伝わるように効果的な方法を工夫して表す。
振り返る力	○自分の工夫したこと、がんばったことが分かる。 ○友だちのよいところに気付く。	○自分の考えや方法を振り返って成長に気付く、新たな課題を見付ける。	○自分や友だちの学習活動を自分なりの視点をもって振り返り、課題を明らかにする。
人とかかわる力	○進んで人とかかわり、人と話をしたり友だちの話を聞いたりする。	○友だちの意見や考えを大切にしながら練り合う中で、互いの考えを深め合う。 ○自分をとりまく人々のよさに気付き、それを自分の学びに取り入れる。	○自分や相手の向上のため、また、自分の考えを練り直すために進んで人と交流する。 ○自分や相手の思いや願いをしっかりと伝えたり受け取ったりする。 ○地域の人々や立場の違う人と理解し合いながらかかわる。

また、内牧小学校では全学年を通して、特に、「表現力の向上」に重点をおいて取り組んでおり、それにかかわる育てたい力も明確に示している。

表2 「表現力」にかかわって育てたい力

育てたい力	1 ・ 2 年	3 ・ 4 年	5 ・ 6 年
聞く力	○話をしている人を見てもうなずきながら聞く。 ○話の内容を考えながら最後まで聞く。	○話し手の言いたいことを考えながら、聞く。 ○話し手の考えを自分の考えと比べながら聞く。	○話し手の意図を考えながら聞き、自分の感想をもつ。 ○話し手の意見と事象との関係を考えながら聞き、自分の感想や意見をもつ。
話す力	○みんなに聞こえる声ではっきりと話す。 ○自分の話したいことを最後まで、はっきり話す。	○聞き手に分かりやすい言葉を使って、話す。 ○聞き手を意識して自分の考えを話す。	○時と場に合った声量と速さで、自分の考えや理由を明らかにしながら話す。 ○話合いの目的や意図に応じて、相手・場・内容に合った話し方をする。

内牧小学校では、教員がこれらの目標を絶えず意識して指導に当たるとともに、子ども自身も生活科や総合的な学習の時間を通じて、どのような力を付けたいのかを意識したり、どのような力が付いてきているのかを振り返ったりしている。その結果、一年間の学習を終えた子どもの感想の中に次のような内容が見られた。

「そば作りやおやつ作りのときに、協力する力が付いたと思います。前まではみんなの話をおかず、意見ばかり言っていたけれど、反対に聞くことも大切だなあと分かりました。」
(3年生男児)

「ぼくは、(そば粉を使った)おかし作りをして『発見する力』が付きました。試作のときに、ここが足りないのと違うとかの発見する力が付きました。でも3年生からもっと意見を出してもらったり、(自分自身に)まとめたりする力が足りなかったと思います。」
(4年生男児)

イ 教科学習との関連を重視

総合的な学習の時間では教科学習との関連を図ることが重要になってくる。

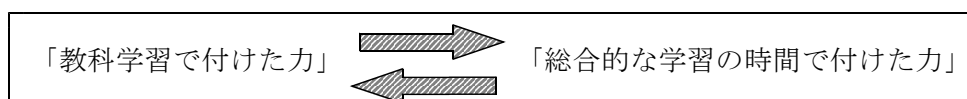


図2 「教科学習」と「総合的な学習の時間」の関連

具体的には、図2で示したように「教科学習で付けた力」と「総合的な学習の時間で付けた力」が相互に作用していることが大切である。例えば、課題解決のために調べた事柄をまとめるときには、国語科で培った「読むことや書くこと」の表現力や算数科で培ったグラフや表を作成する力なども必要になってくる。逆に総合的な学習の時間で学んだ学習の手順や段取りを考える力は、教科学習でも生かすことができる。総合的な学習の時間に子どもから「算数の時間に『割合の求め方』をもう少しちゃんと勉強しておけばよかった。」とか「社会科で学習した資料の調べ方がここで役立った。」などの声が聞かれれば、教科学習と総合的な学習の時間の関連が図られているとも言える。

内牧小学校では、表現力の向上に力点をおいていたことから、特に国語科との関連に力を注いでいた。具体的には、国語科の時間を通して自分の考えを相手に分かりやすく伝えることに重点をおいたり、朝の会で一人一人が交代でスピーチする時間を設けたりするなどして、「話す・聞く」を中心とする表現力の向上に努めていた。「話すこと」と「聞くこと」は表裏一体の関係であるという観点に立っての取組であった。特に興味深かったのは、みんなの前で意見を発表する前に、必ず「言ってもいいですか。」と確認し、聞き手は「いいです。」や「ちょっと待ってください。」などと返事をしていることであった。これは、子どもに、「話す・聞く」という活動を大切にしようとする力がついてきた表れだと考える。

ウ 子どもが必要とするゲストティーチャー

総合的な学習の時間に、専門的な知識や技能をもったゲストティーチャーを招いて学習する機会が増えている。しかし、実際は指導者がお膳立てしたもので、子どもたちにとってはお客さんとしてのゲストティーチャーで終わっているケースがよく見られる。あらかじめ指導者が学習計画に組み入れたもので、子どもが真に必要を感じて招いたゲストティーチャーになり得ていないのである。本来ゲストティーチャーは、子どもが自分たちの学習課題の解決やより深い探究のため



図3 そば屋の主人から教えてもらう

に必要不可欠なものでなくてはならない。このようなゲストティーチャーの活用が主体的な学びにつながる。

内牧小学校では、3学期に地域の人や保護者に自分たちの打ったそばを食べてもらう学習を組み立てていた。そのゴールを目指し、2学期、そば打ちの体験学習を行った。1回目は自分たちが調べた方法でそば打ちをしたが、そば粉を水とうまく混ぜ合わすことができずパサパサになったり、包丁で切ったそばが短く縮れた状態になったりして、見た目にも味も決してよいものではなかった。この体験を受けて、本物のそば屋さんにはぜひそば打ちの仕方を教えてもらいたいという声が子どもから出てきた。つまり、子ども自身が自らそば打ちの専門家をゲストティーチャーとして招く必要性を感じたのである。そして、1学期にそばのことについて質問したことのある榛原区（旧榛原町）のそば屋のご主人に来ていただくことになった。

半月後、そば屋のご主人を迎えて2回目のそば打ちの学習が行われた。子どもたちは、そば粉と水を混ぜる段階から矢継ぎ早に主人に質問を浴びせた。「1回目の水と粉の量はこれくらいでうまくいかなかったの、変えてみたのですがこれでいいのですか?」「そば粉と水を混ぜ合わせるとき、手はどのように動かせばいいのですか?」「包丁で切るとき、どのように切れば細長

いそばになるのですか？」など、子どもたちの質問は1回目の学習を振り返り、それを生かした内容であった。まさに子どもが必要としたゲストティーチャーであった。

5 研究結果と考察

総合的な学習の時間の取組や成果については、学校によって大きな違いが見られるとの指摘がある。指導目標の設定や指導法の工夫が、各学校に任されている総合的な学習の時間では、今、まさに教員一人一人の指導力、創造性が求められている。今後も総合的な学習の時間を通して、どのような子どもを育てようとするのか研究を進め、この時間のより一層の充実に努めてまいりたい。

6 おわりに

総合的な学習の時間については、どのようなねらいで学習しているのか保護者に見えにくいという指摘がある。教科学習と違って教科書もないためかもしれないが、総合的な学習の時間の取組についての説明不足という事実も否定できない。今後、学校として総合的な学習の時間の重要性や具体的な取組のねらいや内容について、保護者に対してさらに周知する必要があると考える。内牧小学校の一年間に及ぶ取組をまとめた生涯学習番組もこのような目的を中心として、今後活用の推進を図っていきたい。

参考文献

平成16年度研究紀要「生きる力を育てる教育課程の創造」 榛原町立内牧小学校 2004